

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 27 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520342

研究課題名（和文）1930年代のシュルレアリスムにおけるアナキズムと個人主義

研究課題名（英文）Anarchism and Individualism on Surrealism in the 1930s

研究代表者

永井 敦子 (NAGAI ATSUKO)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：50217949

研究成果の概要（和文）：

1930年代のシュルレアリスムにおけるアナキズム的志向が、ブルジョワ的個人主義とファシズムや共産主義に見られる全体主義のどちらにも抗うために取られたものであったこと、その思想的源泉の重要なひとつが19世紀末の後期象徴主義の詩人たちにあり、またこの試みが戦後のシュルレアリスムにも継承されたことを、文献の分析により示した。

研究成果の概要（英文）：

On this research, I proved the following.

The tendency to anarchism of surrealists in the 1930s was the result of their repulsion against not only bourgeois individualists but also the totalitarianism of the fascism and the communism. Surrealists were in this sense inspired by the last symbolists of the 19th century and this tendency to anarchism was succeeded by post war surrealists.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2011年度 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |
| 総計 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学、思想史

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代フランスの代表的近・現代美術史家であるジャン・クレールの『全体主義と交霊円卓との関係におけるシュルレアリスムについて』（2003）など、現在のフランスにおけるシュルレアリスムに対する批判的言説には、シュルレアリスムが全体主義的で暴力を肯定するイデオロギーを展開し、その影響が今日まで続いているというものがある。こう

した言説に対してはレジス・ドゥブレなどによって反論がなされたが、その後具体的な事例に基づいた有効な議論が展開されることはなく、シュルレアリスムの美学と政治的態度との関係に関しては、一般的にも研究者のあいだでも未だ了解がなされていない点が多くある状況であった。

(2) 一方申請者はこれまでの研究により、1930

年代の社会的危機のなかでシュルレアリストたちが抱えていた根本的な問題は、近代の芸術創造の個人主義的傾向をどのような形で乗り越えれば、創作者が他者と社会に開かれうるかを問うことにあったこと、また当時の運動が示したアナキズム的側面も、そうした問題意識の反映であることを理解するにいたった。さらに当時のシュルレアリスムのマルクス主義、トロツキズムなどの政治思想への傾倒、精神医学やフロイトの精神分析や自我論への関心、さらに社会学や民族誌学への関心など、一見拡散的に見える多様な関心事に、この問題意識が横断的に見られることを確認した。しかしながら、1983年にジョゼ・ピエールが『シュルレアリスムとアナキキー』で論じた問題は、シュルレアリスムの同時代状況との関係が中心であり、またアンドレ・ブルトンをはじめとするシュルレアリストにおける政治と美学の問題をめぐる近年の代表的研究と言える2005年のアントワヌ・コンパニョンの『反近代の人々』や、2007年にアメリカで出版された講演録集『シュルレアリスムと政治』にも、近代の個人主義的傾向の反省的超克や、シュルレアリスムのアナキズムの系譜との関係に注目した考察がなかったため、本研究を着想するにいたった。

2. 研究の目的

(1) 以上の背景をふまえ、1930年代のシュルレアリスム運動を主たる考察対象としつつ、それを通時的、共時的に広い視野から考察することによって、その作品の政治的・思想的射程と当時のシュルレアリストたちが直面していた困難の所在を明らかにする。それを通じて、ブルトンらの芸術的試みが、ブルジョワ的な個人主義にも全体主義的なイデオロギーにも陥らず、さらには社会変革の意識を持ちながらも、無差別的、破壊的な暴力の行使とは一線を画するものであるとしていたことを示す。

(2) バタイユ、マルロー、カミュなど、シュルレアリスム運動に関係した芸術家、さらにシュルレアリスムの周辺、あるいはシュルレアリスムの批判者とされる芸術家、思想家たちの作品や言説をこの点から分析し、従来の図式的構図を踏襲することなく、彼らの思想と作品に見られる対話状況、及び彼らのシュルレアリスムに対する評価と批判の根拠を探る。

3. 研究の方法

(1) こうした問いに関する1930年代にいたる以前の状況を、19世紀末の象徴主義の時代の

作家、思想家まで遡って確認する。

(2) 1930年代のシュルレアリスムにおけるアナキズムや個人主義の問題を検討する上で重要と思われる作家たちの作品を分析し、それをシュルレアリスム運動の中心にいたアンドレ・ブルトンらの著作との比較において位置づける。

(3) 第二次世界大戦後の1950年代初頭におけるシュルレアリスムのアナキズムへの関心の向け方を、カミュとの『反抗の人間』をめぐる論争に関する文献や、アナキズム系の雑誌への投稿論文等より分析する。

4. 研究成果

主として以下の成果があった。

(1)

① 初期のシュルレアリストたちが読んだことが証明されている19世紀末の後期象徴主義作家たちのアナキズム論を分析し、そのシュルレアリストたちへの影響の性質、継承された暴力論の性質を明らかにした。それによって、従来のシュルレアリスム研究が、シュルレアリスムのアナキズム的傾向の主たる源泉をベルリンやチューリヒで発生し、パリに伝播した芸術運動であるダダイスムに見ていたのに対して、19世紀フランスの象徴主義詩人たちのアナキズム的思考を主たる源泉のひとつとし、ダダを全く経由せずに自らのアナキズム的思考を独自に発展させていったシュルレアリストたちが存在したことと彼らの思考とを明らかにした。

② さらにジョルジュ・パランドなど、後期象徴主義とシュルレアリスムとの中間的時代において個人主義的アナキズムの思想を展開した思想家たちが、1920年代以降の左翼的思想家・作家たちの思想に与えた影響の内容と射程を分析し、その重要性を主張した。

以上の研究成果を雑誌論文④、及び図書①において発表した。

(2)

① 1930年代に芸術家、思想家たちが共産主義との関係の構築方法に悩み、各自の共産党および共産主義との関係の持ち方に応じて分裂の構図を描いてゆくなかで、ブルトンらが『社会批評』の周辺にいた者たちやジョルジュ・バタイユらの社会学研究会に接近するなかで、彼らと共有しえた全体主義批判の視座を分析し、それが第二次世界大戦期、戦後期のシュルレアリスムの思想へと継承されてゆく過程を示した。

② さらに今まであまり注目されてこなかった

た、1930年代に革命作家芸術家協会に所属しながら共産党には批判的態度を取り、特に他の思想家たちに先んじてスターリン主義を批判していたクロード・カーアンやピエール・カミナードらの作品を分析し、当時の、さらに戦後のシュルレアリストたちと彼らとの思想的共通性を明らかにした。

③カーアンについては、特に政治的文書『賭けは始まっている』を分析、紹介し、この詩論がどのような論拠によって社会批評と文学批評とを両立させえたかを示し、あわせて彼女がシュルレアリストたちのグループとバタイユたちのグループとの間でいかなる議論を行っていたかを当時の資料から具体的に辿ることにより、1930年代のシュルレアリスムを理解する上での、共産主義と資本主義の両方を警戒する彼女の思想の重要性を示した。

④カミナードについては彼の作品における個人主義的傾向のあらわれ方を明らかにした。特に彼の詩学研究と短詩の分析を行い、第二次世界大戦後のアメリカで、シュルレアリスムからも影響を受けた詩人たちが書いた短詩との比較を行い、カミナードが用いているレトリックに見られる個人主義的志向と他者との交流可能性の希求との共存という特徴を明らかにし、カミナードらの思想がその後のシチュアシオニストたちに与えた影響を指摘した。

⑤さらに、シュルレアリスムとは対立関係にあったとされる1930年代のアンドレ・マルローとアンドレ・ブルトンの思想を比較検討し、彼らの共産党批判の論拠にある個人主義的思想やアナキズムへの部分的共感のあらわれに見られる共通性を明らかにすることによって、従来の図式的対立関係の正当性に疑義を呈した。

以上の研究成果を主として雑誌論文②、③、④、及び図書①、②において発表した。

(3)

①戦後のシュルレアリストたちが自らのアナキズム的傾向にいかなる思想的深化や修正をもたらしたかを、カミュ、サルトルとの「反抗論争」を中心に検討し、カミュのシュルレアリスム批判の正当性と不当性とを明らかにすることを通じて、ブルトンの個人主義的傾向とアナキズムへの共感が、アナキズム的暴力行為の肯定へとつながっているというシュルレアリスム批判への反駁を行った。

②特にジュリアン・グラック他1940年代後半から1950年代初頭にシュルレアリスム周

辺にあって、アナキズム的思考や行動を取った作家・思想家の著作を、彼らのランボー論やロートレアモン論を中心に分析し、それらを19世紀末以降の各時代、さらに同時代やその後に書かれた他の作家・思想家によるそれらの作家論と比較した。それによって、彼らがこれらの作家を評価するなかで、1930年代の自らのアナキズム的思想にいかなる修正を加えたか、さらに第二次世界大戦後の政治・社会状況において、いかなる活動と文学創造が可能であり必要であると考えていたのかを検討し、明らかにした。

以上の研究成果を主として雑誌論文①、学会発表①、図書③において発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①永井敦子、アンドレ・ブルトンとアナキズム、思想、査読無、未定(ゲラ作成済)、総22頁

②Atsuko NAGAI, Les formes brèves chez Pierre Caminade: l'esprit du haï-kaï, Revue des Archives municipales de Toulon, 査読無、3巻、2011、pp.23-30

③永井敦子、ジョルジュ・バタイユによるアンドレ・マルロー『人間の条件』論解題、水声通信、査読無、32巻、2011、pp.170-177

④ Atsuko NAGAI, L'Individuel et le collectif dans "Lautréamont toujours", Julien Gracq (lettres modernes, minard), 査読有、7巻、2010、pp.259-271

[学会発表] (計1件)

① Atsuko NAGAI, L'Individuel et le collectif dans "Lautréamont toujours", Julien Gracq: la mémoire et le présent, 2011年1月30日、Université de Toulouse, France

[図書] (計3件)

①永井敦子、水声社、別冊水声通信ジュリアン・グラック、2011、160-184

② Atsuko NAGAI, CNRS Editions, Dictionnaire Malraux (André Bretonの項目執筆)、2011、115(1頁)

③永井敦子、水声社、クロード・カーアン—鏡のなかのあなた—、2010、275

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永井 敦子 (NAGAI ATSUKO)

上智大学・文学部フランス文学科・教授

研究者番号：50217949

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし